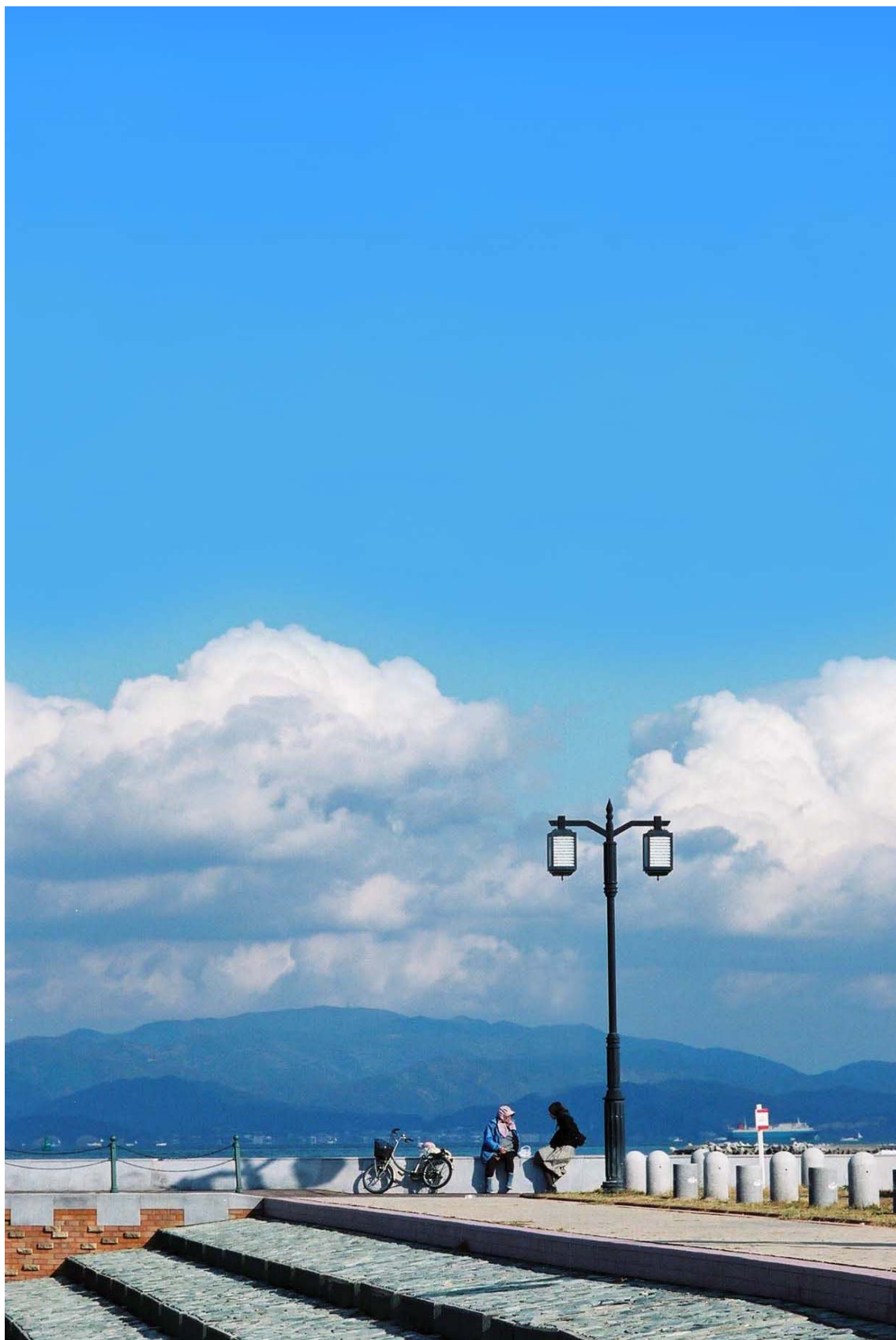


第5章 天高く秋



心地よい秋風が吹く海で、若い女性と老女が語り合う姿があった(四国徳島市)。

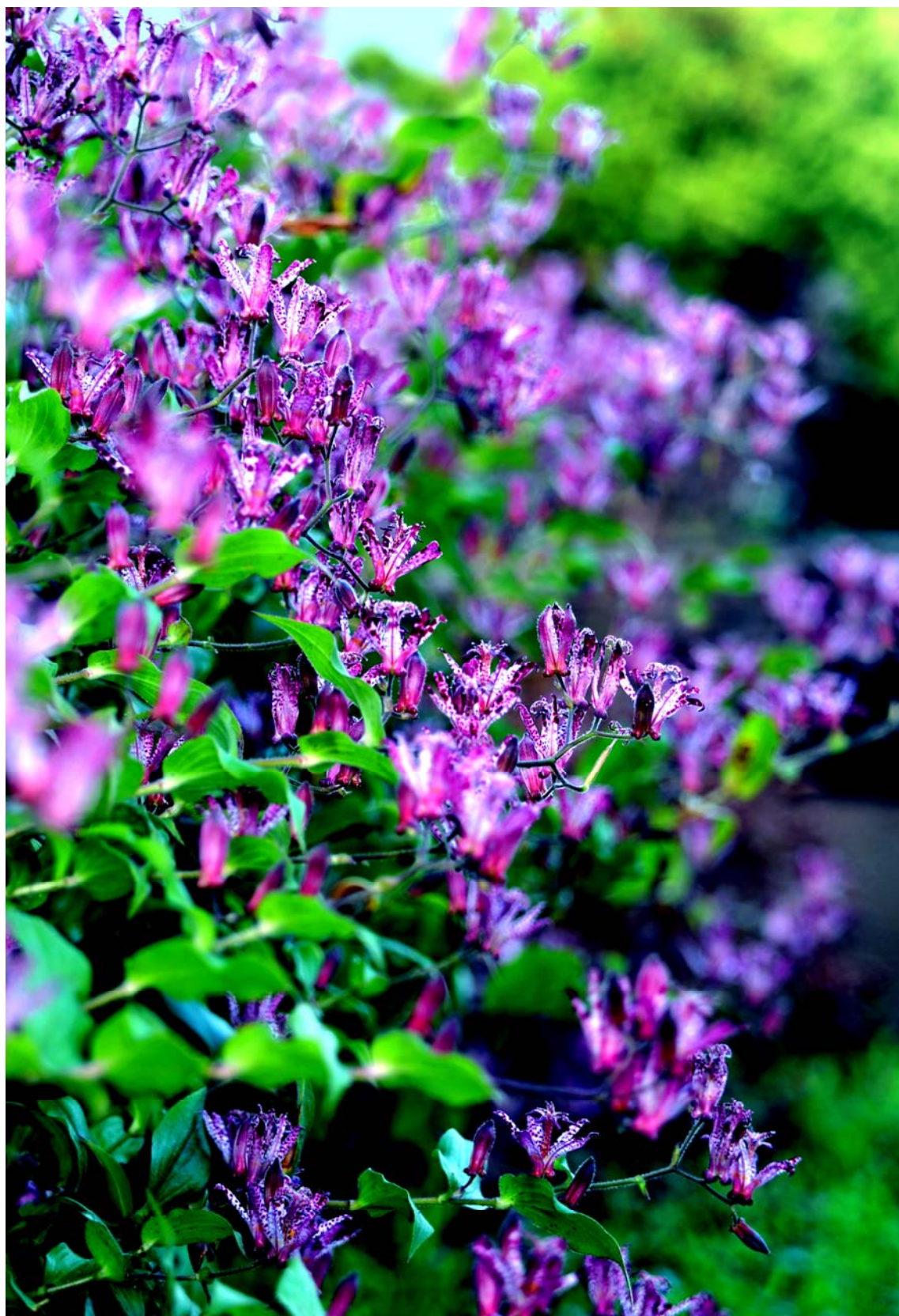
【 I 】 秋草の花語るらく

「かたはらに秋草の花語るらく亡びしものは懐かしきかな」と歌ったのは若山牧水である。小諸の『懐古園』のかたすみに、この句の石碑があつたが、島崎藤村の『千曲川旅情の歌』の影で、ほとんど見る人もない。しかしこの歌は芭蕉の一句「夏草や 兵どもが 夢のあと」に匹敵するぐらいいい歌だと思う。

人間は春から夏へと向かうときには、人生の悲哀や過去のことなど考えもしない。ところが秋風が吹いて次第に寒さが増してくると、急に哲学的思考モードに入る。時の流れや、人生の苦楽を現実のものとして捉え、自己との比較や、自己との矛盾において物事を考えるようになる。秋草といえどもいつかは枯れていつかは滅んで、人の一生にも似ている。こんなふうに思えるのも、秋だからということなのだろう。春や夏には人間のほうが植物よりも、何となく優位に立っていると思えていたものが、秋になると人間も植物も対等の関係に見えてくる。この季節、それだけ人間が謙虚になるのかも知れない。

秋草の代表といえば、昔は七草だったのだろうが、今ではむしろコスモスとか、サルビアや、ベゴニアなど、外国から渡来した美しい花の方が、幅を利かせている。しかも日本古来から分布している秋の花というのは、10月を過ぎると極端に少なくなるようで、赤とか黄色とか、色の鮮やかなものは皆無になってしまう。そしてマツムシソウ、リンドウ、ホトトギス、トリカブト、ノギク、シュウメイギクなどなど、不思議と青もしくは青紫系の花が多い。これも人の心を寂しくさせる一つの原因になってはいないだろうか。さらに萩や金木犀、山茶花など以外に、秋の花木類を見つけることは極めて難しい。秋は木の花の乏しい季節でもあるのだ。『万葉集』に登場する花で、萩が最も多い理由もこのあたりにあるような気がしてならない。萩しかなかったのである。万葉や平安時代の人々は、春の花のように華やかさも彩りも少ない秋の花に、一層のこと愛しさを感じるとともに、人生の儚さを重ねていったのだろう。もの哀しい物語の舞台は、昔も今もやはり秋なのである。

※ネマトーダ=ネマトーダは地中に生息する線虫類のことで、体長は1mm以下で、ミミズを小さくしたような形をしている。多くの種類がおり、植物の根や葉に寄生して大きな被害をもたらす。とくにネグサレセンチュウは、植物をまったく間に枯らしてしまふ。通常は土壤消毒を行って駆除するが、根絶するのは困難で、まずは発生を防ぐことが肝心である。それには野菜などでは連作を避けること、化学肥料に頼らず堆肥や油粕、牛馬分など有機肥料を多く用いること、それと土を良く耕して掘り起こし、日光にさらすことも効果的である。しかし最近では線虫の嗅覚が鋭いことに着目、ガン細胞独特の臭いをかぎ分けて、早期にガンを発見させる研究も進められている。



一瞬、目を疑うほど見事に咲いたホトトギス(さいたま市緑区)。

この項に記されている植物のリスト

【I】秋草の花語るらく	05-01-00-1
1) シュウカイドウとベゴニア=秋海棠	05-01-01-1
2) マツムシソウ=松虫草	05-01-02-1
3) リンドウ=龍胆	05-01-03-1
4) ホトトギス=杜鵑草	05-01-04-1
5) トリカブト=鳥兜	05-01-05-1
6) シュウメイギク=秋明菊	05-01-06-1
7) ノギク=野菊	05-01-07-1
8) サルビア	05-01-08-1
9) キク=菊	05-01-09-1
10) サフラン=雑腹蘭	05-01-10-1
11) コルチカム	05-01-11-1

目次に戻る
